

機関番号：12102
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19401038
研究課題名（和文）太平洋島嶼部における強制移住経験者の歴史認識構築と未来への
投企に関する研究
研究課題名（英文）Collective Memory of the Forced Migration and the Quest for
Self-determination: The Case of Banaban Diaspora
研究代表者
風間 計博（KAZAMA KAZUHIRO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：70323219

研究成果の概要（和文）： バナバ人は、第二次大戦中、強制的に故郷の島を追われ、帰郷を果たすことのできない太平洋のディアスポラである。戦後の 1945 年 12 月、バナバ人は姻族や友人のキリバス人とともに、バナバ島での燐鉱石採掘再開をもくろむ英国植民地政府によって、フィジーのランビ島へ移送された。世代を重ねた現在、多くはフィジー国籍を有している。バナバ人は、たとえキリバス人の親族がいたとしても、キリバス人とは異なるエスニシティであると強く自己主張している。しかし、身体的・文化的指標によって、バナバ人とキリバス人とを明確に弁別するのは困難である。むしろ「バナバ人であること」とは、バナバ島出自の自己意識、および強制移住の悲劇的歴史に関する集合的記憶の共有によって主張されるものである。

研究成果の概要（英文）： During WWII, Banabans, with some I-Kiribati spouses and friends, were forced to evacuate their homeland by Japanese troops. In 1945, the displaced people were gathered and forcibly brought to Rabi Island in Fiji by the British, instead of returning to their home island. This study aims to investigate how the Banaban diasporas distinguish themselves from their familiar people, I-Kiribati, and how they construct the Banaban nation with the quest for self-determination. In physical, legal and cultural senses, the boundary between the Banaban and the I-Kiribati categories is quite ambiguous. The critical reference to the distinction is the recognition of collective memory concerning the past tragedy of forced migration, and the firm insistence on their ties with the home island, Banaba.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
総 計	3,800,000	1,140,000	4,940,000

研究分野：人類学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：ディアスポラ 強制移住 集合的記憶 エスニシティ キリバス フィジー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第二次世界大戦中、中部太平洋に位置するバナバ島（旧オーシャン島）から強制的に排除され、帰郷を果たせないままフィジー諸島のランビ島で困窮化した生活を

送るバナバ人、およびランビ島を離れた二次的移住者を対象とする。バナバ島は、現在キリバス共和国の領土となっているため、フィジーに住むバナバ人ディアスポラにとって故郷は、国境を隔てた遥か彼方にある。

(1) 燐鉱石の発見から採掘拡大

本研究対象の人々の故郷であるバナバ島は、中部太平洋に位置し、台地状の隆起サンゴ礁からなる絶海の孤島である。1900年に英国人技師アルバート・エリスによってバナバ島では良質の燐鉱石が発見された。この発見によって、バナバ島は歴史的な大転換を迎えることになる。

燐鉱石の発見直後、詐欺まがいの契約が住民との間に交わされ、太平洋諸島会社によって、燐鉱石の採掘が開始された。そして1901年、バナバ島は、英国によって保護領化され、1916年にギルバート・エリス諸島植民地（GEIC: Gilbert Ellice Islands Colony [現キリバスとツバル]）の一部となった。

その後1919年には、英国燐鉱石委員会（BPC: British Phosphate Commission）にバナバ島での採掘および輸出の権利が委譲された。燐鉱石は、肥料としてオーストラリア、ニュージーランド、英国等に運ばれた。燐鉱石採掘関連の労働力は、主にギルバート・エリス諸島植民地内から調達された。さらにソロモン諸島民、中国人や日本人も働いた。バナバ島は短期間のうちに、鄙びた絶海の孤島から、近代的な設備の整った中部太平洋随一の繁栄した島へと急速に変貌を遂げた。こうしたなか、先住のバナバ人は相対的に少数者となった。そして、文化的に近いキリバス人出稼ぎ者とバナバ人との間では、通婚や養子縁組が頻繁になされた。

1920年代までに、住民の生活にとって重要な果樹等を伐採しないという契約時の条件は無視されるようになった。年を経るにつれ、燐鉱石の採掘域は強引に拡大され、住民の生活領域にまで及んだ。1928年には英国植民地政府による強制的な土地収用が行われた。この時期、住民と採掘者との間で頻繁にトラブルが発生した。

(2) バナバ島からの強制退去

やがて太平洋戦争が始まり、バナバ島民の悲劇的経験は加速することになる。1942年、太平洋に侵出してきた日本軍によってバナバ島は爆撃を受け、さらに占領された。戦時下の孤島において、海路の物資輸送手段は断たれ、食料不足が深刻化した。そこで日本軍はバナバ人やキリバス人を、近隣のナウル、コシャエ（現ミクロネシア連邦）、キリバスのタラワという3地点へ強制的に移送した。さらに、日本軍による住民の虐殺事件も起こったという。

第二次世界大戦終結後、1945年12月15日、3地点に分散させられていたバナバ人（703人）、バナバ人の配偶者や友人のキリバス人（300人）が、英国植民地政府の説得工作に誘導され、故郷バナバ島への帰還ではなく、3000キロも南方に離れたフィジーのラ

ンビ島へ移送された。バナバ人たちは、故郷の島は戦時の爆撃によって荒廃し、人間が居住できなくなったという虚偽の情報を聞かされていたという。

ランビ島は、コブラ生産のプランテーション経営のためにリバー社が所有していた。英国燐鉱石委員会は、バナバ人の移送を見越して、島を事前に購入していたのである。購入資金は、バナバ島における燐鉱石の売却益から捻出された。

ランビ島への人々の移送は、バナバ島における燐鉱石の採掘拡大を目論む英国植民地政府が、反対する住民を排除するためにとった方策として理解できる。果たしてその後、燐鉱石の採掘は再開され、かつて人々が生活していた集落の土地までも、徹底的な採掘の対象になった。

(3) 故郷の島からの分断

バナバ人が移送された当初のランビ島には、事前に聞かされていた住宅もなく、人々は簡易なテント住まいを強いられた。熱帯とはいえ、赤道直下で晴天が多いバナバ島とは異なり、ランビ島の多雨と寒さに人々は苦しめられ、病気で死んだ者もいた。故郷とはまったく異なる生態環境の下で生きていくために、バナバ人は、土地に適合した新たな生業技術を習得する必要があった。

その後、バナバ島の燐鉱石採掘に基づく補償や年金を受け、住宅等も整備されて、ランビ島での生活は徐々に安定してくる。そして1970年代、バナバ人たちは、ロンドンで英国政府や燐鉱石委員会を相手に訴訟を起こした。結果は勝訴であったが、バナバ人の主張は十分に認められたわけではなく、人々にとっては納得できない判決であった。しかし、不十分な金額ながらも、人々は賠償金を不承不承受け取るしかなかった。

一方、1970年にランビ島を含むフィジーが、1979年にバナバ島を含むキリバスが、英国植民地から独立した。すなわち、ランビ島のバナバ人は、故郷の島から国境線を隔てて分断されることとなった。キリバス独立の前夜には、故郷との分断を拒んだランビ島のバナバ人が、キリバスによる故郷の領有に反対するためにバナバ島に集結し、激しい抗議行動を起こした。人々の要求は、バナバ島と第二の故郷ランビ島を領土とする国家の独立だった。

バナバ島では、キリバス独立が独立した1979年に燐鉱石採掘が終了した。英国は、燐鉱石の枯渇によって、植民地を運営する経済的基盤を失ったため、キリバスを独立させたとされる。植民地支配を続ける経済的メリットがなくなったのである。

約80年間にわたる燐鉱石の採掘により、バナバ島の内陸部は荒廃し、人間が居住でき

る状態ではなくなった。現在のバナバ島には、狭小な未採掘の海岸部において、故郷に戻ったバナバ人やキリバス人の公務員等、約 300 人が生活している。バナバ島には、月 1 便の小さな貨客船が人間と物資を運ぶだけである。結局、燐鉱石の発見以前のように、外部とかわらうじてつながった辺境の孤島に逆戻りした。以前と比較して酷いことに、荒廃した土地が広がるバナバ島では、外洋での漁撈を除くと、自給的生業活動が不可能になったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文献研究および民族誌資料を分析・考察して、以下の諸点を明らかにするものと集約できる。

①バナバ人は、いかに悲劇的な強制移住の経験に関する過去の出来事を認識しているのか、世代を超越して集合的記憶を共有・伝達してきたのか。

②他者（とくにキリバス人）との対峙において、バナバ人ナショナリズムを醸成しながら、いかにエスニシティを形成し、差異に根差した諸権利を主張しているのか。

③さらに、世代交代が進行するなか、間接的に経験された強制移住の歴史を踏まえて、フィジー生まれの人々がいかに未来を見据え、模索し、自らを投企しているのか。

これらを論じていく中で、ディアスポラとしての生き方や、エスニシティ形成のあり方、さらには、他者と対峙し、自他を峻別する集合的記憶、それに付随する感情生成のあり方を明示したい。

3. 研究の方法

（1）文献研究

文化人類学および隣接諸分野（社会学・社会心理学等）における、ディアスポラ論、記憶・認知論、エスニシティ論に関する文献を収集し、文献研究を行って、理論的素地を形成する。

また、バナバ人の歴史等に関わる文献を収集し、具体的な文字記録の情報を蓄積する。

（2）実地調査

フィジーおよびキリバスに居住するバナバ人の日常生活の様態を探る。フィジーの首都スヴァ、キリバスの首都タラワといった二次的移住地、多くのバナバ人の生活拠点であるランビ島を調査対象とする。

そして、多くのバナバ人がディアスポラのエスニック・マイノリティとして困窮した生活を送るなか、キリバス人やフィジー人との

関係において、いかに自らの他者性を自覚しているのか。いかにエスニシティを構成し、自己主張するのか。個々の状況に応じて、人々がどのような将来に向けた方策を採るのか、といった諸点に着目する。人々の日常生活への参与観察によって、具体的な情報を収集する。

（3）収集情報の分析・考察

実地調査によって得た民族誌的事例や、文書等による具体的な情報を分析し、文献研究の成果と照らし合わせて、考察を行う。

4. 研究成果

（1）概況

正確な統計資料はないが、バナバ人は、フィジーに約 5000 人いると言われている。その多くが、第一次移住地のランビ島で生活している。ただし、バナバ島からの移住第一世代は高齢化し、減少しつつある。2000 年代に入って、ランビ島生まれの第二・第三世代がバナバ人のほとんどを占めるようになっていく。

また、ランビ島では、空き家が目立つようになった。これは、フィジー都市部（スヴァ、ラウトカ、ナンディ）や、キリバスの首都タラワへの二次的移住が頻繁に起こっているためである。

なお、第二次大戦前になされた、バナバ島でのキリバス人やツバル人等との通婚・養子縁組によって、現在、すべてのバナバ人は「混血」と言われている。すなわち、あらゆるバナバ人には、キリバス人の親族がおり、加えて多様な出自をもつのである。

また、元来あったと主張されるバナバ語は、キリスト教布教に使われたキリバス語によって駆逐されたと説明される。現在ランビ島でバナバ人が話す言語は、確かにキリバス語である。しかし、英語やフィジー語の語彙が入っている。また、一般的なキリバス語の単語とは異なる語用法もみられる。ランビ島において居住した 60 年以上の年月を経て、混成した新たな言語や文化が、形成されてきたのである。

（2）ランビ島の窮状

フィジーには多くのエスニシティの人々が混住する。なかでも、フィジー系住民やポリネシア系ロトゥマ人は先住民として、政策的に優遇されている。アジア系移民のインド系住民や華人は政策的・日常的に差別されている。アジア系移民は、都市において商業に従事し、その主たる担い手として経済力を有する者も多い。

対照的に、太平洋諸島から来たエスニッ

ク・マイノリティであるバナバ人ディアスポラは、ソロモン系住民と並んで、最貧困層に位置づけられている。先住民としての権利はなく、公的セクターや商業セクターにおいて卓越した地位を築くこともできないためである。なお、ソロモン系住民は、19世紀にブラックバーディング（西洋人による詐欺まがいの労働力の徴用）によってフィジーに連れて来られた、プランテーション労働者の子孫である。

ただしバナバ人は、フィジーに特殊な経緯でやってきた移民マイノリティである。したがって、ランビ島は、英国植民地期からフィジー独立以降、現在に至るまでバナバ人の居住が法的に認められている。いわば、バナバ人自治区といった様相を呈している。

ランビ島政府は、燐鉱石の補償金等によって運営されてきた。バナバ人を代表してフィジー政府やキリバス政府との交渉に当たっている。また、かつてランビ島政府を中心として、燐鉱石の補償金を元手にして、バナバ人の生活に資するために企業が興された。しかし、試みは失敗して、多くが経営難に陥って倒産した。現在では、スヴァとナンディのカヴァ・バー（嗜好性飲料カヴァを有料で提供する店）を除くと、島政府のビジネスは、ほとんど機能していないようである。

1979年、バナバ島の燐鉱石採掘終了に伴う年金の停止以降、ランビ島では困窮化の度合いが強まった。ランビ島政府の管理する燐鉱石資金も減少の一途をたどっている。かつて整備された、ランビ島のインフラストラクチャーは老朽化している。しかし、資金不足から、島政府が自立的に補修することはできない。フィジー政府や海外NGO等からの援助なくして、島の生活は立ち行かなくなっている。度重なるサイクロン被害や豪雨による土砂崩れといった自然災害からの復旧についても、外部からの援助に依存するしか術はない。

無料で運行していた学生用の通学バスも2000年代半ばの一時期、壊れたままであった。ニュージーランドからの援助により、バスが新たに供与されるまでの間、中学・高校の生徒たちは、小さなピックアップ・トラックを利用するか、急峻な坂道を数時間かけて徒歩で通学するしかなかったという。

長らく発電装置もなかった。ようやく2006年頃になって、各村落では朝夕のみ電気が利用できるようになっていた。これも、ヨーロッパ等、外部からの援助によって可能になったものである。

ランビ島において現金を得るための職業は、きわめて限られている。ランビ島政府の事務所、フィジーの郵便局や警察、学校といった公的機関を除けば、小規模の個人商店くらいしかない。島政府関連の職に就いてい

も、燐鉱石資金が減ったために、2000年代中葉以降、給与が削減される等の措置がとられていた。

一般世帯では、換金用のカヴァやココヤシを栽培して細々と収入を得る以外に、現金獲得の主たる方法はない。日常的な食料は、主に自給的栽培のキャッサバやタロイモ、魚介類に依存している。

（3）フィジー都市・キリバスへの再移住

こうした状況下にあつて、ランビ島からフィジーの都市部やキリバスへ、就業や教育機会を求めて出て行く者が後を絶たない。しかし、困窮した生活のなか、教育資金を捻出するのも容易ではない。

フィジーでは、バナバ人学生はエスニック・マイノリティ向けの奨学金以外に、学資の外部からの獲得は困難である。多くの若者が高等教育を受ける機会が閉ざされたまま、都市に留まる。結果として、不定期の労働や単純労働に就いて、低所得者層の生活を営むことになる。

そうした状況下にあつても、高学歴を得てフィジーの銀行員や大学教員、公務員として中間層の一部を形成するバナバ人もいる。中間層の場合、バナバ人としての自意識を保持しながら、移民マイノリティとして、フィジー社会に順応することになる。あるいは、通婚によってフィジー系の社会に同化する場合もある。

一方、バナバ人は査証なしでキリバスに入国・滞在できる。フィジーでの困窮化を逃れて就職・教育の機会を得るため、あるいはキリバス系親族からの土地相続を目的として、キリバスの首都タラワに再移住するバナバ人もいる。

ランビ島で育った一部の若者は、タラワに渡ってキリバスの高校で教育を受けている。そして、キリバス政府やオーストラリア等から奨学金を獲得し、フィジーに戻って大学で学ぶという戦略を採る。

高学歴を得て、フィジーで培った英語力を生かし、キリバスの高級官僚や安定した半官半民企業に職を得るバナバ人もいる。その場合、アイデンティティのあり方は、複数ある。まず、①自らのバナバ人エスニシティを否定し、キリバス人を名乗る場合がある。対照的に、②キリバス社会で生活していても、バナバ人としての自覚を維持し続け、自らをキリバス社会における他者と強く自認する者もいる。そうした人々は、将来的にランビ島に戻ることを希望する。さらに、③アイデンティティを特化させず、ニュージーランド等の第三国へ移住する者も見られる。

（4）バナバ人の不満とナショナリズム

排他的なバナバ人ナショナリズムが醸成

される基盤には、以下のように、強制移住させられたディアスポラとしての強い被害者意識があり、人々は今日でも多くの不満を抱えている。これは今日のランビ島やフィジー都市部における、バナバ人の困窮状態と密接に関連している。

第一に、キリバス政府が故郷の島を領有し、バナバ人が排除されていることである。バナバ人は、自ら全く非がないにもかかわらず、英国に騙されて、ランビ島に移送された。そして、燐鉱石の採掘により、バナバ島内陸部は、人が住めないほど荒廃した。さらに、キリバス政府によって、故郷の島さえも奪われたのである。

第二に、島の土地のみならず、バナバ島の燐鉱石輸出によって得た利益もまた、キリバス政府に篡奪されていることである。燐鉱石の利益は、採掘時に積み立てられて基金化されている。これは、歳入均衡化準備基金（RERF: Revenue Equalization Reserve Fund）として、キリバス政府が所有している。基金の運用益は、コブラ生産以外に見るべき産業のない、キリバスの国家歳入における重要な部分を占めている。バナバ人からすれば、故郷の島の土はバナバ人のものであり、そこから得た利益もバナバ人のものである。

第三に、バナバ人は不当に困窮状態に置かれている。ランビ島やフィジー都市部に住むバナバ人は、フィジーにおいて権利が十全に認められていない。フィジーでは、移民のエスニック・マイノリティとして、大学への就学も条件のよい職への就業も困難である。さらに、キリバスは独立国家として、海外からの援助を直接受けることができるが、ランビ島はあくまでフィジーの一離島に過ぎない。海外援助があっても、フィジー政府に供与されるのみであり、ランビ島のみが優遇されることはない。

バナバ人はしばしば、「キリバスは金持ちである」と述べる。その理由は、バナバ人の基金を篡奪し、海外からの援助を直接受け取ることができるためであるという。

一方、フィジーにおいて学業成績が良く、経済的に余裕があったり、フィジー人の父をもち奨学金獲得に有利なバナバ人の子弟は、高学歴を修めることが可能となる。大学卒業者は、フィジーやキリバスで銀行員、公務員や教員等の安定した職に就く可能性が高い。さらにニュージーランドやオーストラリア等、海外へ移住する者もいる。

こうした都市エリートの一部に、バナバ人ナショナリズムに傾倒する者がいる。西洋人の協力下、バナバ人の歴史や移住経験、神話等の情報を収集して本を編纂したり、バナバ人問題のホームページを立ち上げ、エスニシティの独自性や、先住民としてのバナバ島の権利回復を主張する者がいる。

バナバ人ナショナリズムに結びつく情報は、ランビ島での学校教育、都市におけるバナバ人の拠点（スヴァのランビ島政府事務所、バナバ人のメソジスト教会、島政府経営カヴァ・バー等）においてロコミにより、低所得者層を含む多くの人々によって好意的に受容され、広く流布していくのである。

（５）集合的記憶の伝達

ランビ島のバナバ人は、第一の故郷であるバナバ島への帰還を強く希望している。同時に移住先のランビ島を第二の故郷と見なしている。

ランビ島住民は 1945 年の上陸記念碑を島の海岸近くに建立している。そして、毎年 12 月 15 日を中心に、上陸を祝う式典やパレード、ラグビー等のスポーツ、歌や踊りの大会を開催する。式典時、バナバ人舞踊団は、神話時代から英国による燐鉱石の採掘、第二次世界大戦中の日本軍による爆撃と虐殺、ランビ島への移住といった苦難の歴史経験を、創作した歌劇により表現する。

2000 年年代に入って以降、神話や、老人の強制移住の体験談をまとめた書物が、海外やフィジーの都市エリートによって編纂され、上梓されている。ランビ島の学校においても、バナバ人の歴史に関する授業が行われ、世代を超えた歴史経験の集合的記憶が伝達されている。

この集合的記憶は、均質で直線的であり、公的に権威づけられ、内容は選別・標準化・固定化されている。ここには、均質なバナバ人エスニシティやアイデンティティを生成する、強固なイデオロギーが包含される。固定化された集合的記憶は、人間のカテゴリーに明確な境界線を引き、他者の排除を厭わない思考を広範に流布させる原動力となっている。

ナショナリストの言説は、フィジーにおける生活の困窮化に伴って、経済的下層の人々を感情的に動員する。歴史的悲劇を強調する言説は、バナバ人エスニシティの固有性の主張と不可分である。

（６）流動するエスニシティ

一方、人々も認めるように、あらゆるバナバ人は、キリバス人との「混血」である。身体的にも文化的にも、キリバス人と大きく変わるところはない。しかし、ディアスポラとしての悲劇的歴史に関する集合的記憶の共有、バナバ島出自の強調、そして、社会・生態的環境の異なるランビ島やフィジーでの生活経験によって、自己意識ならびに集合的なエスニシティとして、キリバス人とは異なるバナバ人がつくられている。

一方、バナバ人の系譜を引きながらも、バナバ人のナショナリズムを批判するエリートもいる。タラワに住み、キリバス政府やキリバスの教会において要職に就き、自らバナバ人でなくキリバス人を名乗る場合もある。

このように、エスニシティとしてのバナバ人の固有性を強調して独立を要求する者、バナバ人の固有性を否定してキリバス人となった者、フィジー人に同化していく者、コスモポリタンな太平洋島嶼人としか名づけようのない都市エリート等、多様なバナバ人（固有のネイションを主張するバナバ人、バナバ系キリバス人、バナバ系フィジー人等）がいる。人々は、意識的・非意識的にアイデンティティのあり方を模索しながら、それぞれの生活経験に即して、自らを不確実な未来へ投企しているのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①風間計博 「フィジー諸島・ランビ島における韓国ドラマ受容のあり方—ジェンダーの差異を軸とした一考察」 『比較文化研究』3巻：1-15, 2007. 査読有

②風間計博 「人類学における生物性の諸相—身体と感情の解放に向けて」 『社会人類学年報』34巻：25-50, 2008. 査読有

〔学会発表〕（計2件）

①風間計博 「過剰な感覚が呼び醒ますもの」文化人類学会第43回研究大会 2009年5月30日 大阪国際交流センター

②風間計博 「キリバス環礁における〈もの〉と身体の相互関係」文化人類学会第42回研究大会 2008年5月31日 京都大学

〔図書〕（計4件）

①風間計博他 『知の大洋へ、大洋の知へ』塩田光喜編 彩流社 2010, pp.203-244.

②風間計博他 『南太平洋を知るための58章—メラネシア・ポリネシア』吉岡政徳・石森大知編 明石書店 2010, pp.252-261.

③風間計博他 『文化人類学事典』日本文化人類学会編 丸善 2009, pp.252-255.

④風間計博他 『オセアニア学』吉岡政徳監修 京都大学学術出版会 2009, pp.387-402.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

風間 計博 (KAZAMA KAZUHIRO)

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：70323219